

聖書:士師記2章1～15節

説教:主にいけにえを献げる

はじめに

今日の箇所はよく見ますと、少し不思議な構成となっています。1章1節は「ヨシュアの死後」ということばから始まっていたのに、2章8節に「ヌンの子ヨシュアは百十歳で死んだ」とある。いったいどうなっているのか。こう考えるとよいと思いません。新しい映画を見たいと思ったら皆さんまず何をしますか。監督はだれ、俳優はだれ、内容はどうなの、いろいろ知りたいと思うでしょう。映画のパンフレットにはそういうこと書いています。あらすじを読み、おもしろそうだと思う映画館に行く。ここはそれに似ている。一章は士師記のあらすじで、二章から初めて本編が始まる。だからヨシュアが死んだことが二回出て来ても別に不思議ではない。これと同じような書き方は創世記の一章と二章でもされていますので、興味のある方は調べてみてください。

1 イスラエルが直面した二つの問題

この士師記は、イスラエルがエジプトを脱出してカナンに入ったときから、ダビデがイスラエルの王となる時代まで、この二つの時代にはさまれたおよそ三百数十年ほどの間、イスラエルがどのように歩んだのかを記しています。

そのカナンにまさに入ろうとしていたときに、モーセは約束の地を目の前にして百二十歳で亡くなります。その跡を継いだヨシュアがヨルダン川を越え約束の地に民たちを導き入れ、十二部族に対してそれぞれの割り当て地を定めていきます。しかし割り当てたと言ってもそれは地図の上にとだけ線を引いただけの話です。実際にはそこにすでにカナン人が住んでいます。それでイスラエルは二つの問題に直面することになりました。

イスラエルにとってカナンは神の約束の地ですから、そこは自分たちの国ですと言いたいわけですが、カナン人がそれを聞いて納得するはずはありません。当然そこで衝突が起きる。これが一つ目の問題。

二つ目。実はこちらの方がもっと大きな問題だったのですが、カナン人はバアルと呼ばれる神々を信じています。それが大変魅力的な神々でしたから、ふらふらと誘惑される可能性があった。

神はこの二つの問題についてどのような態度をとられたのか。それが私たちとどのように関係があるのか、ともに見てまいります。

2 神が語っていたこと

1) わたしの掟を守り行いなさい

士師記の本編の始まりである2章は、ギルガルからやって来た主の使いが非常に厳しいことを語る場面から始まります。1節の中に「あなたがたの父祖たちに誓った地に連れてきて言った」の後が二重かぎ括弧になって、神がかつて語っていた内容はこうだと言っています。いったいいつ語ったのかと調べてみると、イスラエルがまだ荒野の旅を始めた頃のことですが、レビ記26章に確かにこのことが書かれています。神はそのとき三つの事を語っていました。

1節の所は後で触れるとして、2節を読みます。「あなたがたは、この地の住民と契約を結んではならない。彼らの祭壇を打ち壊さなければならない。」

レビ記にはこの命令を守ってそれを行うなら神は大きな恵みを与えると、その恵みの内容が事細かに記されています。「この地の住民と契約を結ぶ」とは、カナン人が信じているバアルの神々の祭壇を拝むことを言います。拝まないのであればべつに祭壇を壊さなくてもよいのでは、と思うかもしれませんが、そんな甘い話ではない。

例えば、ある人たちは北海道神宮に行くとか特別な力をもらえるパワースポットと考えているそうです。そこに立つと厳かな雰囲気が出て、信仰心がなくても思わず拝みたくなる、ということなのでしょう。いっぽう教会はどうか。聖書は偶像を造ることを厳しく禁じていますから、目で見えるところでは何の変哲もない建物に過ぎない。この教会をパワースポットと言う人はだれもいません。世の人たちにとってどちらが魅力的なのか明かです。イスラエルも同じでした。バアルの祭壇がパワースポットに見えたので、偶像を見たことのないイスラエルは簡単に誘惑されてしまう。そうならないようにと、神はあらかじめ打ち壊しなさいと命じられた。それはひとえにイスラエルを守るためです。これが一つ目に語っていたことでした。

2) もし逆らうなら

でも、もしこの命令に逆らったならどうなるか。それが神が語った二つ目のことです。3節。

「それでわたしも言う。『わたしはあなたがたの前から彼らを追い払わない。彼らはあなたがたの敵となり、彼らの神々はあなたがたにとって罠となる。』」

レビ記を見ると、もし神の命令を守り行なうなら、たった五人で百人の敵を追うことができ、百人の仲間で一万人の敵を追うことができる。それほど力を与えて主が敵を追い払ってくださると約束されました。そのような約束をいただいていたのにもかかわらず、結果はどうなったか。11節です。「すると、イスラエルの子らは主の目に悪であることを行い、もろもろのバアルに仕えた。」

「イスラエルの子らは主の目に悪であることを行なった」、このフレーズはこのあと何度も繰り返されていきます。士師記はイスラエルがいかに主に逆らい続けたのか、その歴史が書かれていると言ってもいいほどです。

それで神はどうされたのか。15節。「彼らがどこへ行っても、主の手は彼らにわざわいをもたらした。主が告げ、主が彼らに誓われたとおりであった。彼らは大いに苦しんだ。」

あらかじめ警告されていたのに、それに従わなかったのですから、当然の報いと言えるでしょう。

3 主の契約は変わらない

1) 民は泣いた

主の使いが語るのを聞いていたのは、荒野を旅していたときに実際に主から訓練を受け、救いのわざを経験し、たとえカナンの地に入ってもバアルに誘惑されることなく祭壇を壊すと主に誓った世代でした。それがいま泣いています。自分たちの子どもたち、孫たち、子孫が主の命令を守らずに、バアルを拝んでいく。それで、子どもたちが大変な苦勞をしていく、次の世代が苦しんでいく、そのような未来を知らされたので泣くのです。いつの時代でもどんな親も、子どもが生まれればこの子の一生が幸せになるようにと祈り、孫が生まれても恵みがあるようにと祈ります。その願いが見事に打ち砕かれてしまいました。彼らの気持ちはどのようなものであったのかと考えさせられます。

2) 主に献げた

5節を読みます。「彼らはその場所の名をボキムと呼んで、その場所で主にいけにえを献げた。」彼らはその場所を、「泣く」という意味のことばで

ある「ボキム」を名づけ、その場所で主にいけにえを献げます。主の使いを通して語られたことばは必ずそうなることを彼らは知っていますから、未来を変えることはできません。それでも人々は少しでも子孫たちの苦しみが小さくなるようにと、主にいけにえを献げ祈ります。先祖たちがかつて、主の厳しいさばきのことばを聞いて泣いたことを思い起こして欲しい。そのことを子どもたちに覚えてもらうために、わざわざその場所をボキムと名づけた。

と、いま言いましたが、それだけだったのか。実はもう一つ理由があったのではないか。

3) 主を知らない世代

先週の17日、阪神淡路大震災から25年目ということでもいろいろなことが報道されていました。震災を経験した方々は高齢となり、当時のことを知らない若い人たちが増えていく中で、震災の経験をどのようにして次の世代に伝えていくのか、そのことが課題だと言われています。

イスラエルもあるときこれとまったく同じ問題に直面し、次の世代は主の恵みを忘れてしまいました。このように簡単に主を捨ててしまった人たちに対し、神はどうされるのでしょうか。

4) 契約を破ることはない（レビ記26章42～44節）

今の時代なら、失敗してしまった人たちに対しては「自業自得」とか「自己責任」ということばで切り捨てて終わりでしょう。一度でも失敗した者は、どんなに後悔しても、もとのところに戻る望みはいつさいない。それがこの世界の掟なのだと呼んでいます。

では神はどうなのでしょう。もしも神がいつまでも怒り続けるお方であるなら、確かに望みはなかったでしょう。しかし神はなんと語っていたのか、もう一度よく読んでいただきたい。先ほど飛ばしました1節後半です。「わたしはあなたがたをエジプトから上らせて、あなたがたの父祖たちに誓った地に連れて来て言った。『わたしはあなたがたと結んだわたしの契約を決して破らない。』」

「わたしはあなたがたと結んだわたしの契約を決して破らない。」イスラエルはバアルの神々を拝んで主を捨てて簡単に契約を破っていったのですが、主は絶対に契約を破らないと言われる。いったいどんな契約のことでしょう。民数記26章42節から44節です。少し長いのですが、大切な箇所ですのでお読みします。「わたしはヤコブとのわたし

の契約を思い起こす。またイサクとのわたしの契約を、さらにはアブラハムとのわたしの契約をも思い起こす。わたしはその地を思い起こす。その地は彼らに捨て置かれ、彼らがいなくなって荒れ果てている間、安息を享受する。彼らは自分たちの咎の償いをするようになるが、それはただ、彼ら自身がわたしの定めを退け、わたしの掟を嫌って退けたゆえである。それにもかかわらず、彼らとその敵の国にいるとき、わたしは彼らを退けず、彼らを嫌って絶ち滅ぼさず、彼らとのわたしの契約を破ることはない。わたしが彼らの神、主だからである。」

イスラエルが主の掟を退けて、主を捨てたとしても、神は罪を犯し続ける民たちのことを忘れることは絶対がない。かつてアブラハム、イサク、ヤコブと交わした契約、カナンを必ずあなたとあなたの子孫に与えるとの約束を神は果たすのだと言われるのです。

主の使いは、いろいろなことを語っていますが、どんな順番で語ったのか、そこに注目していただきたい。「わたしはあなたがたと結んだわたしの契約を決して破らない。」これを最初に語る。そうしてから厳しいさばきのことばを語る。神はただ怒っているのではない。私たちがどんなに弱くなっても、主の救いの契約はまったく変わらない。もちろん主の約束を守らないという罪に関しては、だまって見過ごすことはしない。必ずその報いを与える神ですが、それと同時に救いの道を用意してくださっている。そのことを知った民は、悲しみと同時に感謝をもって主にいけにえを献げたのではないか。実はこのことではなかったのかと思うのです。

このような民の子孫の一人としてイエス・キリストがイスラエルのベツレヘムでお生まれになりました。どんなときにも主に忠実に従い通した民たちのところに来られたのではない。うなじを堅くして、主に逆らい続けた民たちのところへ来られました。私たちが主の契約など忘れてしまっても、神はアブラハムに語ってくださった契約を絶対に忘れない。

主の契約がどれほどに揺るぎないものであるのか、主イエスは十字架においてそのことをはっきりと示してくださいました。